

<b>Title</b>	大阪湾の港湾都市と三好政権：法華宗を媒介に
<b>Author</b>	天野 忠幸
<b>Citation</b>	都市文化研究. 4 巻, p.87-97.
<b>Issue Date</b>	2004-09
<b>ISSN</b>	1348-3293
<b>Type</b>	Departmental Bulletin Paper
<b>Textversion</b>	Publisher
<b>Publisher</b>	大阪市立大学大学院文学研究科：都市文化研究センター
<b>Description</b>	

Placed on: 大阪市立大学

# 大阪湾の港湾都市と三好政権

—— 法華宗を媒介に ——

天 野 忠 幸

## 要 旨

本稿は、三好長慶と法華宗との関係を軸にして、戦国期における大阪湾の港湾都市の支配を考えることを目的としている。

室町期において、法華宗は西国の港湾都市に最も伝播した宗教の一つであった。そこで造営された寺院や、法華宗を信仰した有力な商人は、やがてその都市共同体を主導する存在に成長する。また法華宗教団内部の人や物の動きは、畿内に求心的な流通構造の一端を担っていた。

四国を本拠とする三好長慶は、畿内支配をめざして大阪湾の港湾都市（堺・兵庫津・尼崎）に進出する。これらの港湾都市は、首都京都を背景にして東アジア経済につながる要港であった。長慶はこれらの港湾都市の法華宗寺院や有力な商人と結びつき、法華宗寺内町の建設を援助し、特権を与えた。彼らはその保護を背景に、都市共同体内における基盤を確立する。すなわち、長慶は彼らを通じて都市共同体への影響力を確立し、流通を掌握しようとしていた。やがて三好氏はこうした法華宗を通じた都市支配から脱却し、代官などを派遣した直接的な支配を目指すようになる。

キーワード：大阪湾，港湾都市，法華宗，都市共同体，三好氏

## はじめに

日本史上、戦国期は最も多様な都市が発展した時代であった。都市は権力から様々な特権を授与・承認され、権力は都市を流通支配の拠点として領域支配を行う方向に向かう。矢田俊文氏によれば、「都市は権力者が居住する支配拠点であり、権力を維持する経済・政治・宗教などの機関が集合する場である。また、都市法により農村と区別された場所」であるとされ、都市と権力の関係は密接であると考えられている<sup>1)</sup>。

たとえば、仁木宏氏は、自治都市が統一政権に敗北したとする従来の自治都市論や、法華一揆を京都の都市民の運動の到達点とする見方を

批判する。そして、日本最大の都市である京都の都市共同体と、室町幕府・細川政権・三好政権・織田政権の関係を段階的に検討し、自律的な問題解決機能をもつようになってきた町共同体の上位に、権力が自らを位置づける関係を取り結んだとする<sup>2)</sup>。また小谷利明氏は、いわゆる「石山合戦」における織田信長と戦った一向一揆・寺内町のイメージが先行していることを批判し、河内国において、浄土真宗系寺内町の形成に守護の公権力としての保証があったことを解明した<sup>3)</sup>。こうした研究を通じて、かつてのように権力と都市の関係を対抗の側面のみからとらえる歴史観は克服されつつある。

ところが、従来から権力と対抗的な存在と見なされてきた堺や、法華宗系の寺内町について

は、あいかわらず権力との関係が等閑視されたままである。これには多分に軍記類の記述が影響していると思われる。『細川両家記』によると、天文一五年（一五四六）、細川氏綱に敗れた三好長慶が堺に逃げ込み「境<sup>(堺)</sup>会合嚙にて」一命を取りとめ、永禄九年（一五六六）には三好三人衆に敗れた松永久秀と畠山高政が同様に堺に逃走し「南北の会合衆嚙として」危機を逃れたとしている<sup>4)</sup>。

こうした記述をもとに、戦国期畿内においては権力が弱体化し、堺などの都市では統一政権に屈服するまで「自由・自治」が維持されると考えられていた。豊田武氏は、堺の有力商人である会合衆が、法華信者である細川氏や三好氏といった権力者と結びつき、門閥的町人として町政を取り仕切る、限定された自由都市が創出されたとする<sup>5)</sup>。尼崎の法華宗系寺内町の形成を述べた脇田修氏も、権力の弱体化による間隙をついた都市自治の伸長を主張している<sup>6)</sup>。

これらの自治都市論に対して、権力論の見地から今谷明氏は、畿内と阿波・讃岐を支配した三好氏を海運や流通に依拠した地域権力であると規定した<sup>7)</sup>。また、藤田達生氏は流通支配の面から、細川氏・三好氏を東瀬戸内海から大阪湾地域を支配した権力として「環大阪湾政権」と述べるなどしている<sup>8)</sup>。しかし、いずれもイメージの域を出ておらず、大阪湾岸の都市と権力の関係についてはいまだ新しい像を結んでいない。

そこで本稿では、大阪湾に面する港湾都市のいくつかをとりあげて、都市と権力のあり方を三好政権の時期を中心に検討したい。また従来から、三好氏は法華宗信者であることが注目されてきたが、その意味についても考えたい。

## 1. 法華宗の西国伝播と武家

最初に室町期における法華宗の伝播のあり方を確認しておこう。

藤井学氏によると、法華宗は都市商工業者や武家領主が信者となって非常に強固な外護関係を作っていた。同宗は日蓮以来、関東を中心に布教されてきたが、室町期に入ると京都へ進出

し、さらには日隆により、西国、特に東瀬戸内海や南海路へ伝播した<sup>9)</sup>。日隆の布教により寺院が建立された場所は、大阪湾岸では、材木の集積地であった尼崎、奈良の外港としての堺、勘合貿易の出発地である兵庫津などであった。また讃岐国の細川氏の守護所である宇多津などで勢力を伸ばしており、日隆の布教によって法華宗信者となった都市商工業者が、武家領主と結びついている点が重要であるとされる。

また、森田恭二氏の研究によると、法華宗各門流の本山で、京都にあった本国寺、妙顕寺、本能寺などの周辺には信者が集住していた。本国寺の場合、遅くとも天文元年（一五三二）までには要害化が進み、「数千人の宗徒」が住む「寺内」が形成されていたとし、織田期には「洛中城郭」として利用されていたと指摘している<sup>10)</sup>。さらに糸久宝賢氏は、一五世紀後半につくられた本能寺の「当門流尽未来際法度」を検討し、日隆門流の両本山である京都の本能寺と尼崎の本興寺が、全国の諸末寺の住持職を掌握して、本山への参詣を義務づけている点などを明らかにした。そして、本能寺の変で焼けた本堂再建の勧進を行った際の記録である「本能寺本堂勧進帳」から、日隆門流の末寺がある種子島、堺、備前、河内の三井、越前、備後、駿河の沼津といった地域で勧進が行われていることを指摘した<sup>11)</sup>。

すなわち、戦国末期にいたるまで、瀬戸内海や南海路の門流末寺から、「南西国末頭」<sup>12)</sup>と位置づけられていた堺の顕本寺や、日隆門流の二つの本山である京都の本能寺、尼崎の本興寺に向かって、かなりの人の流れが存在していた。

こうした末寺から本山に向けた人の流れが集まる大阪湾の港湾都市を、武家権力が積極的に支配しはじめたのが戦国期である。室町幕府の管領であった細川高国は、永正一七年（一五二〇）、近江六角氏との戦争に際して兵庫津の大船を徴発し<sup>13)</sup>、大永六年（一五二六）には尼崎城を築城する<sup>14)</sup>など、都市支配や軍事動員を目指した。また、細川晴元は、阿波の国人である三好元長の推戴を受けて、港湾都市である堺を事実上の政権所在地とする、いわゆる「堺幕府」をつくるにいたる<sup>15)</sup>。

こうした晴元と日隆門流との関係をうかがわ

せるものに、次の史料がある。

【史料1】<sup>16)</sup>

種子嶋より鉄放馳走候て、此方へ到来す、  
誠に悦喜せしめ候、彼嶋へも書状を以て申  
し候、御届けあるべく候、なお古津修理遣  
わし申すべく候、恐々謹言、

四月十八日 晴元（花押）

本能寺（原文は漢文）

細川晴元は鉄砲が種子島より献上されたことを喜び、種子島への書状を届けるよう本能寺に依頼している。

これは、鉄砲が種子島に伝来した天文一二年（一五四三）から晴元が政権の座を追われる天文一八年（一五四九）までに発給されたと考えられる。この時期、天文法華の乱により京都を追われた法華宗の本山寺院は堺に難を避けていた。ここで、日隆門流の末寺である種子島の本源寺から、「南西国末頭」の堺の顕本寺に避難中の本山である本能寺へと鉄砲が運ばれてきたのであろう。人だけでなくこうした物の流れが、法華宗の教線に支えられて展開しており、それがまた法華宗と権力との結びつきをも招来していたことが指摘できる。

すなわち、日隆門流の京都や堺の本山への人や物の流れは、戦国末期まで強く存在しており、それは畿内へ向かう流通構造の一部を担っていたと考えられる。そしてそのことが、武家権力をして、法華宗を通じての流通把握の必要性を認識させることになったと推定されるのである。

## 2. 三好氏の港湾都市支配と法華宗寺院

### (1) 三好氏と堺顕本寺、会合衆

三好氏と堺や会合衆のつながりについてのイメージ形成には、軍記類の影響が大きいことについては先に述べた。そこで、ここでは、軍記類以外の一次史料をもとに、三好氏と堺の関係について論述する。

天文元年（一五三二）、三好元長は一向一揆に敗れ、顕本寺で自害した。一方、天文一向一揆が収束した後、「堺幕府」を主宰していた細川晴元は、その支持基盤を元長ら阿波国人から摂津

国人や河内の木沢長政に遷移させるのにもない、本拠地を摂津芥川に移した。このことから、細川晴元よりも、むしろ三好氏の方が堺、そして顕本寺と深いつながりがあったことがわかる。

【史料2】<sup>17)</sup>

当寺の儀、<sup>(顯本寺)</sup>開運位牌所として寄宿の事、<sup>(三好元長)</sup>長慶・之虎これを免許せられば、冬康においても別して信心の条、聊かも相違あるべからざるものなり、よって状くだんのごとし、

天文廿四

二月二日 冬康（花押）

堺南庄

顕本寺

顕本寺は三好元長の自害の場となった由緒により、位牌所として、子の三好長慶、長慶の弟である三好之虎（のちの実休）と安宅冬康より、軍勢の寄宿免許という特権を獲得する。さらに弘治二年（一五五六）には、元長の二十五回忌法要として千部経の読経が、三好氏の本拠地である阿波でなく、同寺で行われるなど<sup>18)</sup>、顕本寺は三好氏の祭祀上の最重要拠点になっていく。

この顕本寺は、日隆門流内では「南西国末頭」という地位にあった。宝徳二年（一四五〇）に木屋某と飴屋某が自宅を寄進することによって建立されたと伝える<sup>19)</sup>。室町期において、材木は阿波から畿内への主要な商品であり<sup>20)</sup>、材木を取り扱う木屋は阿波との経済的な結びつきを有していた。阿波を本拠とする三好氏も、こうした経済的なつながりを背景に顕本寺との関係を結んだのであろう。

『天文日記』によると、天文七年（一五三八）、「堺南北十人のぎやくしゆ」「渡唐の儀相催す衆」の一人として木屋宗観があげられ、木屋は会合衆の構成員と想定される<sup>21)</sup>。また、顕本寺は会合衆の結集核である開口神社の西南隣に位置しており、会合衆に対しても一定の影響力をもっていたと考えられる<sup>22)</sup>。

いまだ推測にたよる部分が多いが、阿波から畿内への材木流通が顕本寺を媒介にして法華宗と阿波の三好氏を結びつけ、また顕本寺を通じて三好氏は堺の会合衆とも関係を取り結んで

いったのではないかと考えられる。三好氏が、一族の祭祀や宗教的示威行為の場を、本拠地である阿波勝瑞や摂津芥川・河内飯盛山でなく、織田信長や上杉謙信など遠国の大名も来訪した堺に求めたことは、三好氏の勢威を広く示す行為だったといえよう。

## (2) 三好氏の兵庫津把握

兵庫津は応仁の乱で焼失し、その後、繁栄する堺に反比例して衰退したと従来考えられてきた。しかし、元亀元年（一五七〇）には、摂津神領政所今西氏が兵庫南関での運上徴収を興福寺に申し入れるなど<sup>23</sup>、戦国末期にいたってもその港湾機能は維持されていた。

戦国期になると、兵庫津の在地に残された史料が出現する。すなわち正直屋の屋号を持つ有力商人である極井氏の『極井文書』<sup>24</sup>で、その中で最も古い史料が天文九年（一五四〇）の三好長慶判物である。

【史料3】<sup>25</sup> <>内は割書

所々買徳の地<目録別紙にあり>の事、相違なく領知せしむべきもの也、よって状くだんのごとし、

天文九

極二月廿七日 範長（長慶）（花押）

極井甚左衛門尉殿

長慶の父の元長が顕本寺で自害したあと、三好氏はいったん阿波に逼塞するが、その後、畿内に復帰した時には、堺ではなく、摂津国西宮の北に位置する越水城に本拠をおいた。そこで、長慶は摂津西部の要港である兵庫津の把握を目指すようになる。越水城に入った天文八年（一五三九）の翌年、長慶は早速、極井氏に対して「所々買徳の地」を安堵し、新たな港湾支配に向けた関心の高さを示した。

さらに長慶は極井甚左衛門尉について「範長御目を懸けられ候間、自然用の儀候はば、御馳走肝要に候」とした。これは、細川氏被官である庄丹後守から甚左衛門尉が買徳した土地に対する催促を停止し<sup>26</sup>、極井氏を保護して特権を付与する一方、兵庫津から主家細川氏の影響力を排除していく姿勢を示したものである。また安宅冬康が播磨東部で軍事行動を起こした際には、極井氏は「蔵」を免許されて徳政免除の特

権を獲得しており<sup>27</sup>、三好氏の軍需物資を取り扱うようになっていたと思われる。

極井氏は、時代は下がるが天正一一年（一五八三）段階で、兵庫津内において二二石五斗の土地を羽柴秀吉より安堵されている<sup>28</sup>。兵庫津内における極井氏のこうした土地集積は、「郷衆」との確執を生み、永禄一〇年（一五六七）頃、三好氏が出した徳政をめぐる相論となる。兵庫津内の土地をめぐる相論であることから、

「郷衆」は極井氏と同様な有力商人の集まりで兵庫津の自治組織と思われるが、極井氏はこの時、三好氏から徳政免除を確認してもらい、他の「郷衆」に対する優位を獲得することに成功した<sup>29</sup>。このように、極井氏は三好氏の保護を背景に、兵庫津内での地位を固めたと思われる。

文禄三年（一五九四）、兵庫津では、岡方・北浜・南浜という三つの自治組織が確認できるが<sup>30</sup>、極井氏はその一つ岡方の名主を近世を通じて独占しており、地縁的な自治組織を主導する存在となっている。また、近世極井氏の節分儀礼では、室町期に日隆が極井氏の邸宅に寄宿して、久遠寺を日隆門流に改宗させたことにちなんだ行事が行なわれており<sup>31</sup>、極井氏と久遠寺は非常に強い関係を有していた。

鶴崎裕雄氏によると、この久遠寺の僧快玉は、松永久秀が摂津滝山城に、主人である三好長慶を招いて行った連歌会（「滝山千句」）に出席しており、摂津国人の池田氏や芦屋神主範与、堺の等恵・玄哉とともに当時の三好政権の基盤の一人であったという<sup>32</sup>。快玉は天文二三年（一五五四）から永禄四年（一五六一）の「飯盛千句」まで連歌会に出席していたことが確認でき、長慶と恒常的な関係を有していた。

こうした関係からすれば、兵庫津において三好氏は、自治組織を主導していた極井氏を、都市特権と法華宗寺院の両面から掌握する形で、兵庫津を支配下におこうとしたと推測されるのである。

## (3) 本興寺の寺内化問題と尼崎

摂津国尼崎には、京都の本能寺にならぶ日隆門流のもう一つの本山である本興寺があった。

戦国期の都市空間構造の復元研究をした宮本雅明氏によると、尼崎は、大覚寺、貴布祢社、

本興寺、長遠寺、真宗の大物道場、尼崎城など複数の都市核をもち、寺社門前ごとに独自の都市領域を形成した多核的な都市であったという<sup>33)</sup>。

戦国期、本興寺を核として集まった住民の構成の一端を示す史料として、元龜二年（一五七一）の「本興寺門前百姓等起請文」がある<sup>34)</sup>。これは当時、摂津国で織田信長と本願寺・三好三人衆方の戦闘が激化するなど、「寺内物念」な状況に対応して、本興寺の東西南北四つの門前の住人が、本興寺に対して奉公を誓い、連署したものである。

この史料で、住人の出身地を示すと思われる屋号に注目すると、まず尼崎内部の他町に出自をもつものとして、「たつミ屋」（辰巳町）、尼崎の近郊では「別所」「水堂」「なにはや」（難波）があげられる。また、大阪湾岸の菟原郡東部の「なた屋」（灘）や、尼崎のすぐ東側を流れる猪名川上流の国「丹波」もみられる。また、武庫川上流の浄土真宗系寺内町の「小浜や」（小浜）を出身とする商人もあり、住民レベルでは、法華宗信者だけでなく、宗派を超えて新興の町立てに影響を与え合う関係があった。すなわち戦国期の尼崎は、門流の本山として瀬戸内海や南海道の末寺からの流通の終着点であると同時に、尼崎周辺部や摂津国内陸部を貫く猪名川、武庫川などの河川を介する地域流通の中心地でもあった。

このような尼崎において、三好氏の勢力がおよぶのと呼応して、本興寺が寺内を形成する動きを示した。『天文日記』の天文二一年（一五五二）二月六日条をみても。

【史料4】<sup>35)</sup>

尼崎内大物惣道場の事、先年新儀の条破却すといえども、尼崎日蓮衆本興寺として、彼の尼崎惣社の地に寺内を構え、家数これを立つ、福貴せしむべき造意すでに相調え、鍬を初めしむ、安宅渡海せしむにおいて、彼の日蓮共これを取立つべきの段、必然の由候間、自然日蓮党取立て候はば手始になり候、此方道場の事これを取建べきの趣、中務、了誓を以て、大物長衆之を申聞く。

大物長衆は、尼崎において本願寺の末寺である大物の惣道場が破却された一方、法華宗の本

興寺が、尼崎惣社の地に寺内を構え、相当の家数があったこと、そうした本興寺の寺内化の動きが、兵庫津でみたように安宅冬康の軍事行動と連動して、三好氏に法華宗が取り立てられる状況であることを非常に危惧し、本願寺証如に連絡している。

ここでは、本興寺が、荒地を新たに開発して寺内を建立しようとしたのではなく、複数の都市核から構成される尼崎の精神的紐帯である惣社貴布祢社の地を寺内化しようとしている点が注目される。

弘治二年（一五五六）、この危惧が現実のものとなった。三好長慶が惣社の内に形成された「貴布祢屋敷」を「門前寺内」として本興寺に寄進し<sup>36)</sup>、「本興寺門前寺内貴布祢屋敷」を対象とした禁制を発給したのである<sup>37)</sup>。これによって、狼藉禁止、箭銭・兵糧米・諸課役の免除、徳政・国質・所質などの免除などが特権として与えられた。そして、それとともに、「当津衆家を立つ事」が禁じられている。これは、尼崎内の他地区の者が本興寺に断りなく家を建てることを禁止したことを意味し、貴布祢屋敷における本興寺の領主的権限を認めるものであった。

こうして三好長慶との交渉によってさまざまな権限を認められた本興寺は次に、都市尼崎全体を統合する地縁的共同体である尼崎惣中と、事実上の売買契約を取り結ぶ。

【史料5】<sup>38)</sup>

尼崎惣中借錢已下につき、万迷惑の儀、無心を申し候処、代物参万疋御合力に預かり候、御返報として、貴布祢の宮屋敷ならびに中間田畠等、永代御知行として進め置く処、実正明白也、但し社内は、東より西へ式拾式間二尺、南より北へ拾式間、此分は往古相替わらず、永代尼崎の物也、四至の事、東は土井を限る、南は法光寺岸宮の東の道より限る、東南は堀を限る、西北は土井を限ると申し候也、よって後日の状くだんのごとし、

番所司

宗玖（花押）

弘治二年四月三日

宗幸（花押）

助兵衛尉

家重（花押）

本興寺	監物丞
参	長清（花押）
	新兵衛尉
	長秀（花押）

内容から番所司の二名は尼崎惣中の年寄衆と考えられる。彼らは尼崎惣中が借錢によって困窮しているので、本興寺に無心したところ、三万疋の合力を得たので、そのお返しとして「貴布祢の宮屋敷」だけでなく「中間田畠」を本興寺に永代知行として遣わすという。

脇田修氏はこの史料について、尼崎惣中の土地が寺内町になるのであるから、その代償を求めたものであるとされる<sup>39)</sup>。ただ、惣中の財政がかんばしくなく、借錢があったのは確かであろう。だとすれば、本興寺は、尼崎惣中に対して三万疋の合力をしたことで、経済的影響力を獲得したことになる。

こうした本興寺による寺内化の動向は、その対象が惣社の地であったことが重要である。多核的な都市である尼崎において、精神的な紐帯である貴布祢社を寺内化することで本興寺は、都市全体に対して、経済的影響を及ぼしていこうとしていたのである。

三好長慶以前に摂津を支配した細川高国は、尼崎城を築き、都市尼崎を掌握しようとした。しかし、宮本雅明氏の復元によれば、尼崎城は尼崎の中でも周縁の地にしか立地することができず<sup>40)</sup>、都市全体に対する有効な支配拠点にはなりえなかった。こうした状況を踏まえた三好氏は、単に都市核の一つとして本興寺を押さえようとしたのではなく、本興寺を通じて貴布祢社、惣中に影響力を行使し、ひいては都市尼崎全体に対する支配をめざしていたのではなかろうか。

寺内の建立を通じて惣中の把握をめざす支配方式は、三好氏が衰退した後、摂津国を支配した織田信長配下の荒木村重も踏襲している。信長や村重は、長慶と同様に、尼崎において法華宗長遠寺の寺内立てを援助する。

その過程で村重は「尼崎惣中」を長遠寺普請に動員し<sup>41)</sup>、定書を発給する<sup>42)</sup>。その第一条には「御神事祭礼の事、是に付き、貴布祢宮、氏寺・長洲両社諸職進退の事」と定められ、長遠寺の縁起には「長洲貴船大明神社宮地神職当寺

兼帯の事、往古より定むる所也、茲れにより毎<sup>(歳カ)</sup>載正月七日祭礼神事、当山よりこれを執行しおわんぬ」と記載されている<sup>43)</sup>。すなわち村重は長遠寺に、貴布祢社と、尼崎の後背地にあたる長洲御厨の長洲社の神事祭例と神職を支配させることで、尼崎全体を支配しようとしたのである。

信長・村重段階では、こうした法華宗寺院を通じた都市支配がよりいっそう鮮明になっている。

#### (4) 小括

本章では、三好氏権力が法華宗寺院、特に日隆門流を媒介として大阪湾岸の港町を支配していた様子を見た。

これらの都市では、法華宗寺院自体やその外護商人が、都市共同体に影響力を行使できる立場に立っていた。そのため、三好氏は法華宗をつうじて、流通ネットワークだけでなく、都市共同体まで一定程度、掌握することに成功していたのである。

### 3. 日隆門流を越えて

#### (1) 法華「宗」と三好氏

三好長慶と結びついた日隆門流の本興寺は、弘治三年（一五五七）、後奈良天皇から綸旨を獲得して勅願寺となり、日隆には上人号が追贈された<sup>44)</sup>。このころ、三好長慶と日隆門流の結びつきは最盛期を迎える。

永禄三年（一五六〇）、三好氏は河内・大和へ勢力を拡大する。この時、南河内に攻め入ったのが三好長慶の弟で阿波を支配していた三好実休（之虎）である。実休は日隆門流とは別に、堺の油屋常言の子である頂妙寺の日珖に帰依する。実休とその一族、阿波国人などは日珖より受法されており、信仰面の上で強く結びついていく<sup>45)</sup>。

実休の河内畠山氏攻めに従軍した日珖は、永禄四年（一五六一）に「高屋寺内造立の事、畠山殿の屋形なり」<sup>46)</sup>とあるように、実休が占領した高屋城下において、追放された畠山高政の館を下げ渡され、寺内を建立した。また堺にお

いて、実休は屋敷を、油屋常言は伽藍を寄進して、妙国寺を建立するに至る<sup>47)</sup>。油屋伊達氏は、堺の会合衆の一人であると考えられており<sup>48)</sup>、ここでも都市共同体を主導する有力商人、法華宗寺内の建立、三好氏との結びつきが確認される。

永禄七年（一五六四）、いわゆる「永禄の規約」が結ばれる。これは、三好長慶と関係を構築した日隆門流を代表とする勝劣派と、松永久秀を壇越とし、これと教義上対立する本国寺を代表とする一致派の争いを、三好実休一族を中心に阿波国人に受法した日珖が仲を取り持つ形で和睦させたものである<sup>49)</sup>。

こうして永禄年間になると、日隆門流だけでなく、法華宗全体と三好氏が結びついていくようになる。これは、三好氏が、大阪湾の港湾都市を基盤として、京都をめぐる幕府と対立していた状況から、畿内全体へその活動を拡大させていったことに関係していると思われる。

## (2) 法華宗からの脱却と堺の「自治」

しかし、同時に、三好氏は都市支配において、法華宗から脱却していく動向も示しはじめる。

【史料6】<sup>50)</sup>

（前欠）土手方曲事たるべき候、堅く異見を加えられ、無事肝要の事、尚松永弾正忠申さるべき候、恐々謹言、

七月四日 長慶（花押）  
堺南庄中

永禄三年以前に、三好長慶から堺南庄中に宛てた書状で、従来の堺研究で使われたことのない史料である。

堺は環濠によって北・東・南を取り囲まれた都市であるが、「土手」とはそうした環濠に対応した防御施設と堤防を兼ねたものであろう。

堺の環濠の成立時期については、吉田豊氏が史料上の初見が永禄五年（一五六二）であることから、一向一揆が市中にまで攻め込んだ、天文の一向一揆以後に本格的に築くようになり、永禄七年や一一年にさらに整備が進んだと推測している<sup>51)</sup>。長慶はこうした堺をとりまく土手の整備の不行き届きに対して、堺南庄中より意見して「無事」を図るように命じている。三好氏は都市防衛や治水という都市民全体の問題に

管掌して、堺南庄中という都市共同体そのものに文書を発給する支配体制を調べていく。

当該期、城下町や寺内町の多くが惣構を築いている。その背景には、経済流通の活性化、安定的な大規模市場への欲求が、農村とは異なる性格の強化を都市に求めていったため、都市領域の設定がおこなわれたことがある。また、都市民が武家権力に対して生命・財産保護の期待を高めていた<sup>52)</sup>。惣構の築造にかかわって堺南惣中へ命令をくだす三好氏は、自らをこうした堺の都市民の欲求を吸い上げる公権力として位置づけ、都市支配に臨む姿を示したものと見えよう。

さらにフロイス『日本史』の永禄九年（一五六六）の記事によると、「高貴な武士で堺奉行であり大いなる権能を有するゴノスケ殿」が堺にいたことがわかる<sup>53)</sup>。これは三好氏によって、被官の加地権介久勝<sup>54)</sup>が堺奉行に任命され、堺に在住していたことを示す。

また、こうした港湾都市の後背地をおさえるため、堺南庄は安宅氏<sup>55)</sup>、堺五ヶ庄は十河一存<sup>56)</sup>、兵庫下庄は三好三人衆の一人である三好長逸<sup>57)</sup>と、三好氏の有力一族の所領がそれぞれ設定されていた。

三好氏の衰退後、織田信長の支配が大阪湾の港湾都市に及ぶようになる。信長は豪商今井宗久を堺五ヶ庄の代官に任じ、松井友閑を堺奉行として派遣した。信長のこうした堺直轄化の動きは、権力として惣構の問題を管掌し、代官を配置した三好氏の支配に素地があったといえよう。

## (3) 小括

三好氏と日隆門流との言わば「私的な」結びつきは、弘治年間に最盛期を迎える。しかし、同時に、法華宗の寺院や外護商人を通じた都市支配から、武家が地縁的な都市共同体を直接支配の対象にしたあり方へ移行していく動きが、三好氏の支配の後半期にかけてみられるのである。

## おわりに

室町期、大阪湾岸の港湾都市では、有力商人



によって法華宗、とりわけ日隆門流の寺院が造られていく。この日隆門流内部の人・物の動きは、大阪湾から京都へ求心的に集まる全国的な流通ネットワークの一端を担っていたと思われる。さらに戦国期になると、日隆門流の商人や寺院は、こうした富を背景に、都市の地縁的共同体の中心的な地位に位置するようになっていた。

四国から畿内に勢力を伸ばそうとしていた三好氏にとって、その足がかりになる大阪湾における流通を支配することは最重要課題のひとつであった。しかし、一武家権力の力量でそうした流通や、流通の結節点となっている都市を支配することは不可能で、一般の戦国大名に見られるような城下町建設による流通把握はできなかった。

こうした状況下で、三好氏は、従来イメージされるように「用心棒」的な存在<sup>58)</sup>として、都市に外在的に接するのではなく、法華宗寺院を介した支配を試みた。法華宗の寺院や有力檀徒を通じて、都市共同体への影響力を獲得し、都市や流通ネットワークを掌握しようとしたのである。

やがて三好氏はこうした法華宗を媒介とした支配から脱却し、都市共同体に直接文書を発給することで、支配対象に据えていくあり方に転化していく。こうした三好氏の大阪湾支配のあり方は、織豊政権の港湾都市の支配のあり方に先鞭をつけるものであった。

## 注

1. 矢田俊文『日本中世戦国期の地域と民衆』（清文堂、2002）
2. 仁木宏『空間・公・共同体』（青木書店、1997）
3. 小谷利明『畿内戦国期守護と地域社会』（清文堂、2003）
4. 同様の内容は『足利季世記』、『続応仁後記』にも見られる。
5. 豊田武『封建都市 豊田武著作集第四巻』（吉川弘文館、1983）
6. 脇田修「摂津尼崎の日蓮宗寺内町」（同氏『日本近世都市史の研究』東京大学出版会、1994、初出は1977）
7. 今谷明『戦国三好一族』（新人物往来社、1985）
8. 藤田達生「織田政権と尾張」（『織豊期研究』一、1999）
9. 藤井学「西国を中心とした室町期法華教団の発展——その社会的基盤と法華一揆を中心として——」（『仏教史学』六一、1956）
10. 森田恭二「中世京都法華『寺内』の存在——六条本国寺を中心として」（『ヒストリア』九六、1982）
11. 糸久宝賢「法華一揆論——日蓮教団における「門流」の機構を視点として——」（『論集日本仏教史』六、雄山閣出版、1998）
12. 「両山歴譜 日唱本」（藤井学・波多野郁夫編『本能寺史料 古記録編』思文閣出版、2002）
13. 『二水記』永正一七年八月一日条
14. 『如来院文書』永正一六年二月二七日条、『重編応仁記』大永六年条（『尼崎市史』一）
15. 今谷明『室町幕府解体過程の研究』（岩波書店、1985）
16. 『本能寺文書』「細川晴元書状」年未詳四月一八日（立正大学日蓮教学研究所編『日蓮宗宗学全書』二〇、山喜房仏書林、1960）
17. 『顕本寺文書』「安宅冬康判物」天文二四年二月二日（『堺市史』四資料編一）
18. 『細川両家記』『足利季世記』弘治二年六月一五日条
19. 注12参照
20. 今谷氏は、三好氏と阿波の材木の関係に注目している（注7参照）。こうした関係は、尼子氏と出雲の鉄、毛利氏と石見銀山の関係と同様に、地域資源の争奪・確保による発展ととらえられる（岸田裕之「統合へ向かう西国地域」、有光友学編『戦国の地域国家』、吉川弘文館、2003）。
21. 『天文御日記』天文七年正月十七日条（北西弘編『真宗史料集成第三巻 一向一揆』同朋舎、1981）
22. 会合衆の一員となった三宅氏の祖先と考えられる三宅十五郎が、開口神社の西側一帯に引接寺を創建しており（『日本歴史地名大系 大阪府の地名』二、平凡社、1986）、会合衆の先祖が開口神社の周辺に寺院を建立していた。
23. 『学侶引付写』元龜二年一二月七日条（『大日本史料』一〇編ノ五）
24. 問屋真一「十六～十七世紀初頭の摂津国兵庫

- 津史料 一極井家文書の紹介一」（『神戸市立博物館研究紀要』四，1987），『兵庫県史』史料編中世一，中世三
25. 『極井文書』「三好長慶判物」天文九年一二月二七日（『兵庫県史』史料編中世三）
  26. 『極井文書』「三好祐長・松永久秀連署書状」年未詳二月七日（『兵庫県史』史料編中世三）
  27. 『極井文書』「安宅冬康判物」天文二三年四月二二日（『兵庫県史』史料編中世一）
  28. 『極井文書』「羽柴秀吉判物」天正一一年八月二一日（『兵庫県史』史料編中世一）
  29. 『極井文書』「坂東大炊助書状」年未詳六月二七日（『兵庫県史』史料編中世一）
  30. 「三石神社本殿再建棟札」（兵庫県神社会編『兵庫県神社誌』上，臨川書店，1937）
  31. 「靈鷲山久遠寺」縁起条（仲彦三郎編『西撰大観』下，明輝社，1911）
  32. 鶴崎裕雄「滝山千句と三好長慶」（『中世文学』三四，1989）
  33. 宮本雅明「空間志向の都市史」（『日本都市史入門』1，東京大学出版会，1989）
  34. 『本興寺文書』「本興寺門前百姓等起請文」元龜二年一一月二二日（『兵庫県史』史料編中世一）
  35. 『天文御日記』天文二一年二月六日条（北西弘編『真宗史料集成第三卷 一向一揆』同朋舎，一九八一）
  36. 『本興寺文書』「三好長慶寄進状」弘治二年三月三日（『兵庫県史』史料編中世一）
  37. 『本興寺文書』「三好長慶禁制」弘治二年三月日（『兵庫県史』史料編中世一）
  38. 『本興寺文書』「尼崎年寄衆連署契状」弘治二年四月三日（『兵庫県史』史料編中世一）
  39. 注6参照
  40. 注33参照
  41. 『長遠寺文書』「荒木村重書状」年未詳四月三日（『兵庫県史』史料編中世一）
  42. 『長遠寺文書』「荒木村重定書」天正二年三月日（『兵庫県史』史料編中世一）
  43. 『大堯山縁起』（『兵庫県史』史料編中世四）
  44. 『本興寺文書』「後奈良天皇綸旨」弘治二年三月二五日（『兵庫県史』史料編中世一）
  45. 河内将芳「戦国末期畿内における一法華宗僧の動向一日珓『已行記』を中心に」（『戦国史研究』三六，1998）
  46. 『妙国寺文書』「行功部分記」（『堺市史』四資料編一）
  47. 『妙国寺文書』「御目安口口紙」（『堺市史』四資料編一）
  48. 泉澄一『堺 中世自由都市』（教育社，1981）
  49. 『本能寺文書』「永禄七年和睦之記録濫觴」（立正大学日蓮教学研究編『日蓮宗宗学全書』二〇，山喜房仏書林，1960）
  50. 『萬代家文書』「三好長慶書状」年未詳七月四日（『山口県史』資料編中世二）。史料の所在については，村井良介氏の教示を得た。
  51. 吉田豊「堺中世の会合と自由」（『堺市博物館報』一七，1998）
  52. 仁木宏「寺内町と城下町 戦国時代の都市の発展」（有光友学編『戦国の地域国家』吉川弘文館，2003）
  53. 松田毅一・川崎桃太編『完訳フロイス日本史 二 織田信長編Ⅱ 信長とフロイス』第二七章（中央公論新社，2000）
  54. 『渡辺惣官家文書』「加地権介久勝書状写」永禄九年三月二五日（『大和下市史』資料編），『離宮八幡宮文書』「三好政勝以下連署状」年未詳八月二日（『島本町史』資料編）
  55. 『今井宗久書札留』「安宅神太郎宛今井宗久書状案」永禄一二年九月（『堺市史』続編五）
  56. 『今井宗久書札留』「歳阿弥陀仏・祐阿弥陀仏宛今井宗久書状案」永禄一二年八月一七日（『堺市史』続編五）
  57. 『若王子神社文書』「兵庫下庄領知之覚」（『神戸市史』第二輯資料）
  58. 注5参照
- （2004年5月12日 論文受理，2004年7月2日 採録決定 『都市文化研究』編集委員会）



輯製二十万分之一図 「京都及大阪」「和歌山」に加筆

# Port Control in Osaka Bay through the Power of the Miyoshi Family

Tadayuki AMANO

In this article I examine the port control in Osaka Bay through the power of the Miyoshi Family during the civil wars, based mainly on the relation between Miyoshi with the Hokkesyu sect. During the civil wars, various cities developed and were closely connected.

During the Muromachi period, the Hokkesyu sect expanded in the ports of the Western Districts. Their temples and believers who were merchants had leadership in the city organizations later. And they bore the economic structure centered around the Kinai Districts.

During the civil wars, the Miyoshi Family aimed to control the ports in Osaka Bay (Amagasaki, Hyogo, Sakai), because they were international ports with Kyoto in the background. They had strong relations with Hokkesyu temples and believers. They protected the establishment of temple towns and gave believers privilege. As a result, their temples and believers had decisive leadership in the city organizations. In the end, the Miyoshi Family controlled the city organizations through their relations with them. Soon the power of the Miyoshi Family aimed to control them directly.

Keywords : Osaka Bay, port, Hokkesyu sect, city organizations,  
the Miyoshi Family